

## 正・続「墮落論」論

高橋 秀晴

### 1 「墮落論」の破綻

2006年12月15日、改正教育基本法が成立<sup>1)</sup>した。憲法改正に向けた論議も活発化している。「愛国心」や「美しい国」というフレーズとともに、「戦後レジーム」からの脱却が図られようとしている中、抑も〈戦後〉とはいつのどのような状況を指すのかという根本的な問題を考えるためにだけであっても、敗戦直後の日本に鮮烈なインパクトを与え<sup>2)</sup>、世紀が改まった今日においても坂口安吾の代表作たり得ている<sup>3)</sup>「墮落論」(「新潮」1946年4月)を読み返す価値はある筈だ。

「生きよ墮ちよ、その正当な手順のほか、真に人間を救い得る便利な近道がありうるだろうか。」「人間は生き、人間は墮ちる。そのこと以外の中に人間を救う便利な近道はない。」と主張する「墮落論」を、所謂論として生真面目に読んでみるなら、極めて基本的な矛盾や不整合があることに気付く<sup>4)</sup>。まずこの論は、「人間が変わったのではない」という前提から出発している。終わり近くにおいても、「遠くギリシャに発見され確立の一步を踏みだした人性が、今日、どれほどの変化を示しているであろうか。」「人間は変りはしない。ただ人間へ戻ってきたのだ。」と再度訴えて、冒頭との照応を見せている。

——それならそれでいいではないか。何も口角泡を飛ばして「墮落」を叫ぶ必要はない。また、武士道と天皇制について斬新な見解を打ち出しながら、それらを「歴史のぬきさしならぬ

意志」であると結論付けてしまっている点も、「墮落」との関連から言えばよく判らない。不変であり、且つ「ぬきさしならぬ意志」に統御されている存在であるとしたら、人間はどうしようもなくなる。今まで通り、なすがままに生きてゆくだけのことである。

更に論者は言う。

人間だから墮ちるのであり、生きているから墮ちるだけだ。だが人間は永遠に墮ちぬくことはできないだろう。なぜなら人間の心は苦難に対して鋼鉄のごとくではあり得ない。人間は可憐であり脆弱であり、それゆえ愚かなものであるが、墮ちぬくためには弱すぎる。

「墮ちる」と言い、「弱すぎる」から「墮ちぬくことはできない」と言う。にも拘わらず次には、「人は正しく墮ちる道を墮ちきることが必要なのだ」として「墮ちる道を墮ちきることによって、自分自身を発見し、救わなければならない。」と結んでいる。

この論者は一体何を言っているのだろうか。「墮ちる」——「墮ちぬくことはできない」——「墮ちきることが必要」……。ギリシャの時代から不変であって「ぬきさしならぬ意志」の下で生きている人間に対して、できないことを要求しないでほしいと思う。第一、論者は、「墮ちよ」「墮ちよ」と連呼するばかりで、墮落の内容については明らかにしていない。僅かに、生き残り兵が闇屋となることと、戦争未亡人が

恋をすること<sup>5)</sup>のみを具体例として挙げているに過ぎず、これでは殆ど何も言っていないと同然である。そうなのだ、「墮落論」は、語気の強さに惑わされず冷静に読んでみれば、論旨の通らぬ、何の解決も結論ももたらさない駄論なのである。

## 2 「続墮落論」への展開

「墮落論」発表のおよそ8カ月後の1946年12月、続編<sup>6)</sup>が「文学季刊」に掲載された(後に「続墮落論」と改題)。続編においては、武士道に代わって農村精神が俎上に載せられる。これによって、天皇制を利用した貴族階級、武力を以て台頭した武士階級といった支配者層に加えて、被支配者層であった農民をも断罪し、大雑把ながら日本の主立った階層について言及したことになる。

論の展開は正編に較べて格段にスムーズになり、「健全なる同義」に対する疑いを契機として無理なく農村批判へと流れ、「耐乏、忍苦の精神」を否定する。その不合理性が「亡国の悲運」を招いたとし<sup>7)</sup>、軍部と天皇制との関わりへ繋げてゆく手際も鮮やかである。敗戦という状況に、全国的規模の「歴史的欺瞞」を見出した上で、いよいよ「墮落」という言葉の安吾の意味が明らかにされてくるのである。それは次のように要約されるだろう。

- ① 欲するところを素直に欲し、厭な物を厭だと言うこと。赤裸々な心になること。
- ② 封建遺制のカラクリにみちた「健全なる道義」から転落し、裸となって真実の大地へ降り立つこと。
- ③ まず裸となり、とらわれたるタブーをすて、己れの真実の声をもとめること。
- ④ 未亡人が恋愛し、復員軍人が閨屋となること。
- ⑤ 常に孤独なもの、したがって、神、天国に通じているもの。

これらは戦時下の状況の陰画に他ならない。1945年8月15日以前の日本人は、赤裸々な心になれず(①')、「健全なる道義」の枠内で(②')、

タブーにがんじがらめにされながら(③')、未亡人は女性であることを捨て、軍人は神兵とされ(④')、大同団結を強いられて孤独どころではない(⑤')、そんな毎日を送っていた筈である。とすれば、全てが崩壊した戦後において、正・続「墮落論」が訴えた「墮落」とは、ごく当たり前のことを言っていただけなのかもしれない<sup>8)</sup>。当然過ぎて批判され、またそれ故に圧倒的な支持を得たのではなかったか。二つの「墮落論」を巡る毀誉褒貶の分裂の原因をこの当たり前さに求めることは可能であろう。

ところで、「続墮落論」では、墮落の果てに期待されることまで、親切に述べられている。曰く、「人間の復活」、「人間の、人性の正しい開花」、「天国へ近づく」こと……。正編で言うところの「自分自身を発見し、救わなければならない」という表現の意味が漸くはっきりして、そうだったのかと思う反面、何処か興奮する気もする。「墮落」という言葉が帯びている一種破滅的・悪魔的魅力が、「正しい」とか「天国」とかいう健康的な言葉によって損なわれてしまったように思うのである。この部分には、持論の展開に囚われている几帳面なる論者の顔が窺われるばかりで、作家坂口安吾の肉声は聞こえない。

私はただ人間、そして人間性というものの必然の生き方をもとめ、自我みずからを欺くことなく生きたい、というだけである。私が憎むのは「健全なる」現実の贗道徳で、そこから誠実なる墮落を怖れないことが必要であり、人間自体の偽らざる欲求に復帰することが必要だというだけである。(「デカダン文学論」1946年10月)

と云い、また、

醇風良俗によって悪徳とせられること必ずしも悪徳ではなく、醇風良俗によって罰せられるよりも、自我みずからによって罰せられることを怖るべきだ、ということだけはいい得るだろう。(「恋愛論」1947年4月)

と語る安吾が、真剣に「復活」、「正しい開花」、

「天国」といった目的を考えていたとは思えない<sup>9)</sup>。おそらくは、論の展開上の勇み足であったのだろう。

そして「続墮落論」は、政治と文学の問題<sup>10)</sup>に触れつつ収束に向かうのだが、正編において「真実の母胎」であるとされていた「墮落」が「制度の母胎」であると言い改められている点に注意すべきである。そこには、「墮落」の意味の大幅なスケール・ダウンが認められ、結果、竜頭蛇尾の様相を呈しながら、論は閉じられるのである。

### 3 文学としての正・続「墮落論」

「墮落論」は、破綻の論であった。「1」で述べた以外にも、例えば論理展開の必然性に乏しく雰囲気によって進行してみたり、或いは突然「私はハラキリを好まない。」などと趣旨とは無関係な事柄を挿入してみたり、といった瑕疵が幾つか認められ、論としては随分いい加減なものであると言わざるを得ない。「続墮落論」の方は、矛盾も少なく整った文章となっている。にも拘わらず、読者を惹き付ける力は正編の方が遙かに強いのは何故なのだろう。

この疑問を解く前に念を押すべきことは、この二つの文章が、「墮落」論・続「墮落」論という〈論文〉ではなく、「墮落論」・「続墮落論」という〈文学作品〉であるという事実だ。何を自明のことをという叱責はもとより覚悟の上である。しかし、同時代評、先行研究の幾つかは、程度の差こそあれ、この作品を論として読んでしまうという陥穽に嵌っているのである。

それでは、文学作品として読む、とはどういうことか。まず、論理性、実証性、整合性等、即ち文学性以外の諸要素が悉く第一義の座から降ろされなければならない。文学性とは、「言語表現を通して人の心を情的に揺り動かす力」と規定してそれほど大きな間違いではないだろう。乱暴に言い切れば、文学性さえ備わっているなら、論旨が通ろうと通るまいと、学問的に適切であろうとあるまいと大した問題ではないのだ。安吾の言葉で言えば、「どのような矛盾もあり得る」ということになる。文学性の有無、そしてその質の見極めにこそ最大の注意を払っ

て読むべきなのである<sup>11)</sup>。

人間は変わらないということ、美しいものをそのまま終わらせたいということ、武士道や天皇制や農村精神、戦時下の東京で見たいいろいろな美しい光景等、正・続「墮落論」の主張の一つひとつの中に流れている文学性を統べている思想が、つまり、「墮落」という概念なのである。それは、坂口安吾という作家の最大のバック・ボーンでもあるのだろう。

「母と私は憎しみによってつながっていたが、私と父とは全くつながる何物もなかった。」という両親を持ち、「オレは石のようだな、と、ふと思う」（「石の思い」、1946年11月）「私」（それが安吾自身のことかどうかの論議はさておくとして）を描き、「絶対の孤独——生存それ自体が孕んでいる絶対の孤独」（「文学のふるさと」、1941年8月）を意識した安吾の文学的立場は、「人間の全てを、全的に、一つ残さず肯定しようとするもの」（「FARCEに就て」、1932年3月）であった。「絶対の孤独」、徹底肯定、これに落伍者意識を加えるなら、墮落の思想はもう目の前である。

正・続「墮落論」は、論理的な破綻を内包しつつも絶大な共感を以て時代に迎えられた。戦後最大の転換点にさしかかっている今こそ、坂口安吾という文学的個性が普遍性を獲得したことの意味を検証すべきである。その行為が、取りも直さず、制度や政治に「協力」し、また「愛情」を向けること<sup>12)</sup>に繋がってゆくからである。

### 注

- 1) 公布・施行は、2006年12月22日。
- 2) 『「墮落論」によって、主体的な人生としての、ぼくの戦後がはじまったのである。』（『坂口安吾』、文藝春秋、1972年）という奥野健男の発言がとくに有名である。
- 3) 相馬正一氏は、安吾の代表作の特定は困難であるとしながらも、「坂口安吾を今日在らしめている理由は何か、ということになれば、好むと否とにかかわらず『墮落論』（昭21）を挙げ

ないわけにはいかないだろう。」(「文芸たかだ」第182号、高田文化協会、1989年)と、慎重な口調で指摘した。

4) 例えば、「聖女の墮落を説く一方で、二十の美女を好むと言うのは矛盾にもみえる」として、「〈二十の美女を好む〉という表現は『墮落論』の中では異和感を与える表現であることはたしかである」という指摘(『鑑賞日本現代文学第22巻坂口安吾』、角川書店、1981年1月30日)が既にある。

5) この点については、早く、渋川驍の以下の反論がある。

未亡人が夫の死後新しい恋人なり夫を持つことが墮落だとあなたは思いますか。その未亡人がもし新しい男に愛情を持ったり、彼と恋愛し、結婚することは当然正しいことではありませんか。それを彼はなぜ墮落というのでしょうか。また特攻隊の勇士が閨屋となるとしてもある条件のもとでは正しいといえる場合だってあると思うのです。(「墮落論解説」、「文芸」第4巻第4号、1947年5月1日、後、『坂口安吾研究I』、冬樹社、1972年12月30日、所収。)

6) 「『続墮落論』は『墮落論』に寄せられた批判への弁明、補足という意味をもっている」(前掲『鑑賞日本現代文学第22巻坂口安吾』)という捉え方は極めて妥当である。

7) 戦時下の1942年6月に発表された「真珠」(「文芸」)に、「パリジャンやヤンキーは楽天的、日本人はもっと切実に死を視つめて」いるとして、「このどちらが戦場に於て豪胆果敢であるかといえば、大東亜戦争の偉大なる戦果が物語っている。」という記述がある。「続墮落論」と併せて見る時、やや結果主義的な発想に基づいてものを言っていることが判る。

8) これに関連するものとして、河上徹太郎の「つまりこのエッセイは、誠に常識的なものなのである。安吾という人は、そういう常識家である。」(「『墮落論』その他」、「文芸」第12巻第5号、1955年4月)という指摘がある。

9) 野上余志郎は、「墮落論においては、彼は一応墮落をもって向上の前提としている。言い換えれば向上をめざした墮落である。それは肯定のための否定であり、建設のための自己破壊である。」(「否定と憎悪の文学—坂口安吾氏の評論集『墮落論』に寄せて—」、「文学」1947年11月、後、『日本文学研究資料叢書／石川淳・坂口安吾』、有精堂出版、1978年7月1日、所収)と指摘した。また、太田喜一郎は、「『墮落論』の論旨は、「墮落」それ自体に結論があるのでなく、「墮落」を出発点として、その上に成り立つべき「ホンモノ」「天国」「真の人間の幸福」を志向するところにある」(「『墮落論』「白痴」、『新潟県郷土作家叢書1—坂口安吾』、野島出版、1976年4月15日)としている。確かに「墮落論」そのものに即すならこのような見方ならざるを得ない。しかし、それが安吾の本心であるかどうかは、別に検討すべき問題であろう。

10) 野上余志郎は上記論文において、安吾の「政治に対する無知と偏見」を批判した上で、「けっきょく坂口安吾の態度は説明の域にとどまり、変革の情熱に燃えあがらないのである。ここに彼の文学が、破壊の文学、否定の文学として、たとえ純然たる保守反動の御用文学の対立物とはなりえても、新しい建設の文学となり得ない所以がある。」と断定している。「坂口文学」を糾弾した力のある文章には違いないが、自らの文学的価値観から一步も踏み出そうとしない姿勢には問題がある。「建設の文学」も「破壊の文学」も本来等価なのであり、要はそれぞれの質こそが問われるべきなのだ。

11) その意味で、続編は、論理性が増した分だけ文学性が減じたように思われるが、どうか。

12) 「続墮落論」の次の一節参照。

文学は常に制度の、また、政治への反逆であり、人間の制度に対する復讐であり、しかして、その反逆と復讐によって政治に協力しているのだ。反逆自体が協力なのだ。愛情なのだ。